

まちの自慢「北海道遺産：旭橋」

～地域の子供たちが動画で発信～



さわ だ まこと
澤 田 誠*

1. はじめに

2020年、北海道教育大学附属旭川小学校3年1組では、総合的な学習の時間において、旭川の魅力や自慢できるものに着目し、それらを調べ、動画を作成し、観光客など多くの方々に旭川の魅力を伝えるため、メディアを活用して情報発信を行う取組を行った。

生徒が選んだ旭川の魅力や自慢できるものは、自然や歴史、交通、場所（施設）というカテゴリから、全国的に有名な動物園などの他に、交通インフラにも着目され、北海道開発局旭川開発建設部が管理する「旭橋」も選定された。

本稿は、「旭橋」をまちの自慢として、地域の子供たちが作成した動画を発信した取組を紹介するものである。

2. 北海道遺産 旭橋

北海道開発局旭川開発建設部が管理する国道40号旭橋（写真－1）は、一級河川石狩川に架かる橋長224.82m、昭和7年に完成した橋梁である。

旭川市内中心部と北部を繋ぐ交通の要衝として、重要な役割を担っており、かつては、市民の足であった市電が通り、札幌市の旧豊平橋、釧路市の旧幣舞橋とともに北海道三大名橋と称されているが、架橋当時の姿を今にとどめるのは、旭橋ただひとつである。

北海道の国道にある橋梁の中で最も古く、歴史のある橋梁であり、平成16年には、次の世代へ残したい北海道の財産として北海道遺産に認定されている。

橋梁は、ブレーストリブ・キャンチレバータイドアーチという珍しい橋種で、タイには、ドイツのユニオン・パウシュタールという高張力鋼を使用している。また、寒暖差の大きい旭川の気候を意識し、アーチ両端部に設置されたロッキングカラム（写真－2）が温度変化による鉄の伸び縮みを吸収している。更には、橋梁の軽量化を図るため、床版にはバックルプレートを採用するなど、当時としては、画期的な構造となっている。

優雅なアーチを描いた旭橋の姿は、長年にわたって旭川のシンボルとして市民に親しまれ続けている。



写真－1 国道40号 旭橋



写真－2 ロッキングカラム

*国土交通省 北海道開発局 旭川開発建設部 道路計画課 課長補佐

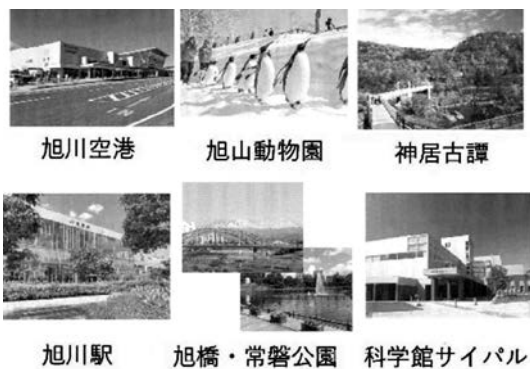
3. 総合的な学習の時間

1) 旭川市の自慢を調べ動画で発信

北海道教育大学附属旭川小学校3年1組では、総合的な学習の時間に、「自分たちのまちの自慢」を調べ、旭川市を訪れる観光客を増やすために、まちの良さを伝える。という目標を掲げ、自慢出来る場所を紹介する動画を作成し、発信する計画を立てた。

2) 自慢出来る場所の選定

自慢出来る場所は、自然や歴史、交通、場所（施設）というカテゴリから、保護者へのアンケート結果をふまえ、6か所が選定された（写真－3）。



写真－3 選定された6か所

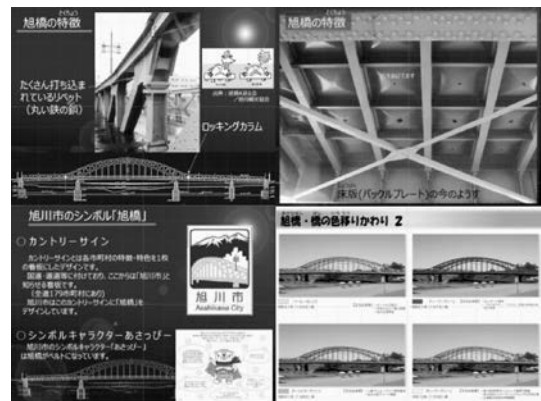
選定された6か所のグループに分かれ、各施設の自慢出来るポイントを見つける調査から開始した。

3) 旭橋における出前講座

旭川開発建設部では、国民との対話を重視したコミュニケーション型行政の推進に向け、その一環として、当部が実施する事業、施策等に関し、もっと知っていただくとともに、意見や生の声を聞く場として「出前講座」を開設しており、旭川は橋梁が多いことから、「橋のはなし」という名称で、橋梁と道路の役割を説明する講座を設けている。

本件は、総合学習に協力している（一社）旭川観光コンベンション協会を通じ当部に依頼があり、小学校の担任教諭より、総合学習の背景・目的、生徒に学んでほしいことなどの説明を受け、旭橋の自慢できる特徴などについて、生徒に理解してもらえるような表現、写真を多用するなど留意した説明資料（図－1）を作成した。また、現地調査は、自動車、自転車及び歩行者の利用が多いことから、これ

らの交通へ影響を及ぼさない調査動線を提案すると共に、生徒の安全を確保するための保安要員として当部職員の適切な配置を行った。



図－1 説明資料

4) 旭橋概要説明・現地調査

概要説明では、旭川市と旭橋のあゆみを説明し、橋の特徴や、自慢出来ることとして、

- ・寒暖の差が大きい旭川の気候を意識した、ロッキングカラムという構造を採用していること
- ・ドイツの材料も使用しており、48万本以上のリベット（丸い鉄の釘）を使っていること
- ・88年経過しても、大きな補修をしていない頑丈な橋であること
- ・橋が完成してから、これまで8回、色々な色に塗り直されていること
- ・イベントでも使用され、市民にも親しまれている橋であること

などの説明を行い、ポイントとなる場所へ移動して調査を行った（写真－4、5）。



写真－4 概要説明の様子



写真－5 現地調査の様子

当日の活動は、地域資源やICTを効果的に活用し、魅力ある観光地を動画で発信する取組として、報道機関も取材に訪れ、一般紙、専門紙に掲載された。

5) 生徒たちの感想

参加した生徒たちから、お礼の手紙が送付された。「旭橋が88歳と聞いてびっくりした」「5年に1度点検したり、色を塗り替えしたりしていることにおどろいた」「少し難しい言葉もあったけど、わかりやすく説明してもらえて嬉しかった」「想像以上に歴史が詰まっていたと驚いた。旭川市に住んでいることを誇りに思った」など、感想をいただいた。

専門的な表現や説明は、やはり難しかったが、特徴や自慢出来ることは伝わったものと考えている。

6) 動画撮影

調査活動を終えた生徒達は、タブレットを使用した動画を撮影するため、収集した情報を整理・分析し、ビデオグラファーから撮影テクニックを学ぶなど準備を行い、動画撮影を行った（写真－6）。



写真－6 動画撮影の様子

7) 動画発表

作成した動画（写真－7）が完成し、「旭橋で見つけた宝物」と題して、6つの自慢が紹介された。

その1：旭橋の「色」は、珍しい色もあったこと。

その2：気温差の大きい旭川では、鉄の伸び縮みを調整するロッキングカラムは大切なこと。

その3：ドイツの材料も使っていて頑丈なこと。

その4：約48万本ものリベットを昔の人は手作業で打ち込んだこと。

その5：旭橋の下を流れる石狩川には、サケやサクラマスが帰ってくること。

その6：花火大会や冬まつりが旭橋のふもとで行われていること。

動画は、(一社)観光コンベンション協会のホームページに掲載され、旭橋の魅力が広く発信された。



写真－7 完成した動画

4. おわりに

旭橋は、令和4年で架橋から90年を迎える。これからも旭川市民に愛され、まちの自慢であり続けられるよう、適切な維持管理を続けていきたい。

北海道遺産「旭橋」の概要、動画「旭橋で見つけた宝物」については、下記のURLを参照されたい。

◇北海道遺産「旭橋」(旭川開発建設部ホームページ)

https://www.hkd.mlit.go.jp/as/douro_keikaku/ho92810000005ugh.html



◇ぼくらが見つけた「まちの宝物」

((一社)旭川観光コンベンション協会ホームページ)

<https://www.atca.jp/machinotakara/>



【著者紹介】 澤田 誠 (さわだ まこと)

昭和50年生まれ。北海道函館工業高等学校土木科卒。国土交通省北海道開発局札幌開発建設部道路計画専門官、北海道開発局建設部道路計画課企画第3係長等を経て現職。